

【 復活のトロパリ 第7調 】

ハリスト スか みよ、なんぢ はじゅう じかに てしを  
 神 爾 十 字 架 死  
 ほろぼ し、と うぞく のた めに らくえんを ひ開  
 滅 盗 賊 の 爲 樂 園 開  
 ら き、けい こ うぢよ のか なしみを なぐさ  
 攜 香 女 悲 慰  
 め、し とに なんぢ が ふく か つして、せ か  
 使 徒 爾 復 活 世 界  
 いにお おいなる あわれ みを たまいしをつたえ  
 大 憐 賜 傳  
 させたま えり。  
 給

【 生神女進堂祭のトロパリ 第4調 】

こんにち かみの めぐみ はしめさ れ、ひ  
 今日 神 恩 恵 示 人  
 とびとの すくい はつたえら る。 どうてい  
 人 救 傳 童 貞  
 ぢよは あきらかにか みのでんに あらわ れて、  
 女 明 神 殿 現  
 あらかじめハリスト スをしゅうじん にしらしむ。  
 預 衆 人 知  
 われらも こえを あげてか れによばん。ぞう  
 我 等 聲 揚 彼 呼 造

ぶ つしゆの おもんぱ かり とじょうじゆなる もの よ、  
物 主 思 慮 成 就 者

よ ろ こ べ よ。

慶

【 日本の亜使徒聖ニコライのトロパリ 第4調 】

し と と ひ と し く ど う ざ な る も の 、 ちゆう  
使 徒 等 同 座 者 忠

じ つ に し て しん ち な る ハリス ト ス の え き しゃ 、 せ い  
實 神 智 役 者 聖

な る しん に え ら ば れ た る ふ え 、 ハリス ト ス の あ い  
神 撰 笛 愛

に み ち た る う つ わ 、 わ が く に の こう  
満 器 我 國 光

しよ う しゃ 、 あ し と し ゆ き ょう せ い ニ コ ラ イ  
照 者 亜 使 徒 主 教 聖

よ 、 なん ぢ の ぼ く ぐん の た め 、 お よ び  
爾 羊 群 爲 及

ぜん せ か い の た め に 、 い の ち を た も う せ い  
全 世 界 爲 生 命 賜 聖

さん しゃ に い の り た ま え 。  
三 者 祈 給

【 復活のコンダク 第7調 】

し の け ん は す で に ひ と び と を と ら う る あ た  
死 權 已 人 人 捕 能

わ ず 、 け だ し ー り ス ト ス は く だ り て そ の ち  
 蓋 降 力  
 か ら を や ぶ り て ほ ろ ぼ し た ま え り 。 ぢ ご  
 敗 滅 給 地 獄  
 く は し ば ら れ 、 よ げ ん し ゃ は ど う し ん に よ ろ  
 縛 預 言 者 同 心 喜  
 こ び て よ ぶ 、 き ゆ う せ い し ゅ は し ん に お る  
 呼 救 世 主 信 居  
 も の に あ ら わ れ た り 、 し ん じ ゃ よ 、 ふ く  
 者 現 信 者 復  
 か つ し て い で よ 。  
 活 出

【 日本の亜使徒聖ニコライのコンダク 第4調 】

こ う え い は ち ち と こ お と せ い し ん に き  
 光 榮 父 子 お と 聖 神 歸  
 す 、  
 せ い せ い し ゃ あ し と せ い ニ コ ラ イ よ 、 わ が  
 成 聖 者 亞 使 徒 聖 我  
 く に な ん ち を た び び と お よ び い ほ う じ ん と う け  
 國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受  
 し に 、 な ん ち は は じ め わ が く に に お い て お の  
 爾 初 我 國 於 己

れを が いら いしゃ と しり た れども 、ハリストスの  
外 来 者 知

ひかり と あた た か き を な が し 、なんぢ の て  
光 暖 流 爾 敵

きを ぞ くしん の こ と な し 、かれら に か  
屬 神 子 爲 彼 等 神

みのおんちよう を あた え、ハリストスのきょう かい を た て  
恩 寵 與 教 會 建

た り 、いま このきょう かい の た め に い の り  
今 此 教 會 爲 祈

たま え 、けだし われら そのしよしはなん  
給 蓋 我 等 其 諸 子 爾

ぢによぶ 、わがよきぼくしゃよ、よろこ  
呼 我 善 牧 者 慶

べよ。

【 生神女進堂祭のコンダク 第4調 】

いまも いつ も よよ に、アミン。  
今 何 時 世 世

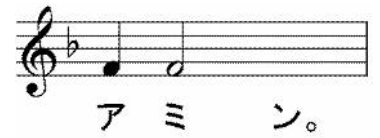
きゅうせい しゅのい と きよ きで ん、いたりて  
救 世 主 最 淨 殿 至

とうと きみや 、かみのこうえいのせいに  
貴 宮 神 光 榮 聖

せられしほうぞうたるどうていぢよは 宝蔵童貞女  
 今日主家入 せいしんのおんちよ 恩  
 うをともにいらしむ。かみのつかいら等  
 はかれをうたいていう、これてんのまく  
 なり。

司祭) ( 黙誦： <sup>せい かみ せいじゃ うち いこ</sup> 聖なる神、<sup>せいさん こえ もつ かしょう</sup> 聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
<sup>さんえい ことごと てんぐん ふくはい ばんぶつ む ゆう</sup> ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と  
<sup>ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ</sup> なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、  
<sup>ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい</sup> 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行ふ者を棄てずして、其救の爲に痛悔  
<sup>た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい</sup> を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な  
<sup>さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの</sup> る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と  
<sup>しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ</sup> なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を  
<sup>もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ</sup> 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と  
<sup>せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい しょう</sup> を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生  
<sup>しんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ</sup> 神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) <sup>けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ</sup> 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世  
 に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る  
聖 神 聖 勇 毅 聖

じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め  
常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い  
聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ  
常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、  
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん  
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。  
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う  
聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせいのものよ、われらを  
 毅 聖 常 生 者 我 等 を  
 あわれめよ。  
 憐

司祭) ( 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國  
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、 )

【 プロキメン 提綱 主日第7調 及び生神女の歌 第3調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主は其民に力を賜い、主は其民に平安の福を降さん、

しゅはそのたみにちからをたま い、しゅは  
 主 其 民 力 賜 主  
 そのたみにへいあんのふくをく だ  
 其 民 平 安 福 降  
 さ さん。

誦經) 神の諸子よ、主に獻ぜよ、光榮と尊貴とを主に獻ぜよ、

しゅはそのたみにちからをたま い、しゅは  
 主 其 民 力 賜 主  
 そのたみにへいあんのふくをく だ  
 其 民 平 安 福 降



誦經) わ たましい しゅ あが わ しん かみわ きゆうしゅ よろこ  
我が 靈 は主を崇め、我が神は神我が救主を悦べり。



【 アポストロス 使徒經 221 端 エフェス書 2 章 14 節～22 節 及び 320 端 エウレイ書 9 章 1 節～7 節 】

司祭) えいち  
睿智、

誦經) せいしと じん たつ しょ よみ  
聖使徒パウエルがエフェス人に達する書の讀、

司祭) つつし き  
謹みて聽くべし、

誦經) けいてい われら わへい ふたつ もの ひとつ な へだて かき こぼ おのれ  
兄弟よ、ハリストスは我等の和平なり、二の者を一と爲し、隔の墻を毀ち、己  
の身を以て仇を廢し、教を以て諸誠の律法を廢せり、是れ和平を爲して、二の者  
を以て、己に於て、一の新なる人を造り、又十字架にて仇を殺し、此を以て、  
一の身に於て、二の者を神と復和せしめん爲なり。且來りて、爾等遠き者及び近  
き者に和平を福音せり、蓋彼に由りて、我等二の者は、一の神に在りて、父に近  
づくを得るなり。故に爾等既に異民、或は他邦の人たらず、乃諸聖徒の同邦の人、  
神の家屬なり、爾等は諸使徒と諸預言者との基に建てられたり、イイスス・ハリストス  
は自ら其隅石なり。此の上に全屋は組み立てられ、次第に築きて、主に於ける聖殿と  
爲る、此の上に爾等も、神に由りて、神の居處として、共に建てらるるなり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) キリストはわたしたちの平和であって、二つのものを一つにし、敵意という隔ての中垣を取り除き、ご自分の肉によって、数々の規定から成っている戒めの律法を廃棄したのである。それは、彼にあって、二つのものをひとりの新しい人に造りかえて平和をきたらせ、十字架によって、二つのものを一つのからだとして神と和解させ、敵意を十字架にかけて滅ぼしてしまったのである。それから彼は、こられた上で、遠く離れているあなたがたに平和を宣べ伝え、また近くにいる者たちにも平



和を宣べ伝えられたのである。というのは、彼によって、わたしたち両方の者が一つの御霊の中にあつて、父のみもとに近づくことができるからである。そこであなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族なのである。またあなたがたは、使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであって、キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である。このキリストにあつて、建物全体が組み合わされ、主にある聖なる宮に成長し、そしてあなたがたも、主にあつて共に建てられて、霊なる神のすまいとなるのである。

\*\*\*\*\*

誦經) 兄弟よ、第一の約には奉事の例と地に屬する聖所とありき。蓋第一の幕は設け

られて、其内に燈臺と、案と、供前の餅とありき、是を聖所と稱す。第二の帷の

後に至聖所と稱する幕ありき。茲には金の香爐と、徧く金を蔽いたる約匱とあり、

其内にマンナを藏めたる金の壺、アアロンの萌せる杖、及び約の碑あり、其上に贖罪

所を覆える光榮のヘルヴィムありき。此等の事は今詳に言うを庸いず。此等の物斯

く備わりて、第一の幕には司祭等恒に入りて、奉事を行い、第二の幕には獨司祭長

のみ、一年に一次、血を攜えざるなくして入り、之を己の爲及び民の愆の爲に獻

ず。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。初めの契約にも、礼拝についてのさまざまな規定と、地上の聖所とがあった。すなわち、まず幕屋が設けられ、その前の場所には燭台と机と供えのパンとが置かれていた。これが、聖所と呼ばれた。また第二の幕の後に、別の場所があり、それは至聖所と呼ばれた。そこには金の香壇と全面金でおおわれた契約の箱とが置かれ、その中にはマナのはいつている金のつぼと、芽を出したアロンのつえと、契約の石板とが入れてあり、箱の上には栄光に輝くケルビムがあつて、贖罪所をおおっていた。これらのことについては、今ここで、いちいち述べることができない。これらのものが、以上のように整えられた上で、祭司たちは常に幕屋の前の場所にはいつて礼拝をするのであるが、幕屋の奥には大祭司が年に一度だけはいるのであり、しかも自分自身と民とのあやまちのためにささげる血をたずさえないで行くことはない。

\*\*\*\*\*

### 【 アリルイヤ 主日第7調 及び 生神女第8調 】

司祭) 爾に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) アリルイヤ、至上者よ、主を讚榮し、爾の名に歌うは美なる哉、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、  
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) <sup>なんぢ あわれみ あさ の なんぢ まこと よ の び かな</sup> 爾の憐を朝に宣べ、爾の眞を夜に宣ぶるは美なる哉、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、  
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) <sup>ぢよ これ き これ み なんぢ みみ かたぶ</sup> 女よ、之を聴き、之を觀、爾の耳を傾けよ、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、  
ア リ ル イ ヤ 。

司祭) ( 黙誦： <sup>ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ し</sup> 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の淨き光を輝かし、我が思

<sup>ねん め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ</sup> 念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠

<sup>おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ</sup> を畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ

<sup>ところ おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ</sup> 所を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神

<sup>なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん</sup> よ、爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善

<sup>いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ</sup> にして生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。 )

【 <sup>エヴァンゲリオン</sup> 福音經 ルカ福音書71端 13章10~17節 及び  
ルカ福音書54端 10章38~42節、11章27~28節 】

司祭) <sup>えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん</sup> 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聽くべし、彼の時安息日にイイスス一の會堂に在りて教を宣べたり。爰に十

はちねんやまい きうれ おんな かが すこのあた これ みよ  
八年病の鬼を患うる婦あり、偃みて、少しも伸ぶ能わざりき。イイスス之を見て、呼び

これ い おんな なんぢ そのやまい と すなわちて かれ の かれたただち  
て之に謂えり、婦よ、爾は其病より釋かれたり。乃手を彼に按せられたれば、彼直に

の かみ さんえい かいどう つかさ スポタ いやし ほどこ いきどお たみ  
伸びて、神を讚榮せり。會堂の宰、イイススが安息日に醫を施ししを燭りて、民

い わぎ な ひ むいか そのうち きた いや スポタ ひ おい しゅ  
に謂えり、工作を爲すべき日は六日あり、其中に來りて醫されよ、安息の日に於てせざれ。主

かれ こた い ぎぜんしゃ なんぢらおのおの スポタ おい そのうしあるい うさぎうま かいばぶね  
彼に答えて曰えり、偽善者よ、爾等各安息日に於て其牛或は驢を槽よ

と これ ひ みづか いわん むすめ こ おんなじゅうはちねん しば  
り解き、之を牽きて飲わざるか、況やアヴラアムの女なる此の婦十八年サタンに縛

もの むすび スポタ ひ おい と かれ これ い とき かれ てき もの  
られたる者の結を、安息の日に於て解くべからざりしか。彼が之を言う時、彼に敵する者

みなは しゅうみん かれ およそ こうめい しわざ よるこ  
は皆愧ぢ、衆民は彼が凡の光明なる行事を喜べり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) イエスが安息日に、ある会堂で教えておられると、そこに十八年間も病気の靈につかれ、かがんだままで、からだを伸ばすことの全くできない女がいた。イエスはこの女を見て、呼びよせ、「女よ、あなたの病気はなおった」と言つて、手をその上に置かれた。すると立ちどころに、そのからだはまっすぐになり、そして神をたたえはじめた。ところが会堂司は、イエスが安息日に病気をいやされたことを憤り、群衆にむかつて言つた、「働くべき日は六日ある。その間に、なおしてもらいきなさい。安息日にはいけない」。主はこれに答えて言われた、「偽善者たちよ、あなたがたはだれでも、安息日であっても、自分の牛やろばを家畜小屋から解いて、水を飲ませに引き出してやるではないか。それなら、十八年間もサタンに縛られていた、アブラハムの娘であるこの女を、安息日であっても、その束縛から解いてやるべきではなかつたか」。こう言われたので、イエスに反対していた人たちはみな恥じ入つた。そして群衆はこぞつて、イエスがなされたすべてのすばらしいみわざを見て喜んだ。

\*\*\*\*\*

司祭) 謹<sup>つつし</sup>みて聴<sup>き</sup>くべし、彼<sup>か</sup>の時<sup>とき</sup>、彼等<sup>かれら</sup>が行<sup>ゆ</sup>ける時<sup>とき</sup>、イイスス<sup>い</sup>の村<sup>むら</sup>に入りしに、或<sup>ある</sup>婦<sup>おんな</sup>マル  
 ファと名<sup>な</sup>づくる者<sup>もの</sup>、彼<sup>かれ</sup>を其<sup>その</sup>家<sup>いえ</sup>に迎<sup>むか</sup>えたり。其<sup>その</sup>姉妹<sup>しまい</sup>にマリヤと名<sup>な</sup>づくる者<sup>もの</sup>あり、イイススの足<sup>そく</sup>  
 下<sup>か</sup>に坐<sup>ざ</sup>して、其<sup>その</sup>言<sup>ことば</sup>を聴<sup>き</sup>けり。マルファは供<sup>きようじ</sup>事の多<sup>おほ</sup>きに困<sup>よ</sup>りて心<sup>こころ</sup>を煩<sup>わづら</sup>わし、就<sup>つ</sup>きて曰<sup>い</sup>え  
 り、主<sup>しゅ</sup>よ、我<sup>わ</sup>が姉妹<sup>しまい</sup>、我<sup>われ</sup>一人<sup>ひとり</sup>を遺<sup>のこ</sup>して供<sup>きようじ</sup>事<sup>じ</sup>せしむるを爾<sup>なんぢ</sup>意<sup>い</sup>と爲<sup>な</sup>さざるか、之<sup>これ</sup>に命<sup>めい</sup>じて、  
 我<sup>われ</sup>を助<sup>たす</sup>けしめよ。イイスス彼<sup>かれ</sup>に答<sup>こた</sup>えて曰<sup>い</sup>えり、マルファよ、マルファよ、爾<sup>なんぢ</sup>は多<sup>おほ</sup>くの事<sup>こと</sup>を  
 慮<sup>おもんば</sup>りて心<sup>こころ</sup>を勞<sup>ろう</sup>せり、然<sup>しか</sup>れども需<sup>もと</sup>むる所<sup>ところ</sup>は一<sup>ひとつ</sup>のみ。マリヤは善<sup>よ</sup>き分<sup>ぶん</sup>を擇<sup>えら</sup>びたり、是<sup>これ</sup>  
 は彼<sup>かれ</sup>より奪<sup>うば</sup>う可<sup>べ</sup>からず。此<sup>これ</sup>を言<sup>い</sup>う時<sup>とき</sup>、一<sup>ひとり</sup>の婦<sup>おんな</sup>民<sup>たみ</sup>の中<sup>うち</sup>より聲<sup>こゑ</sup>を揚<sup>あ</sup>げて、彼<sup>かれ</sup>に謂<sup>い</sup>えり、爾<sup>なんぢ</sup>  
 を孕<sup>はら</sup>みし腹<sup>はら</sup>と爾<sup>なんぢ</sup>が嘯<sup>す</sup>いし乳<sup>ち</sup>とは福<sup>さいわい</sup>なり。彼<sup>かれ</sup>は曰<sup>い</sup>えり、然<sup>しか</sup>り、神<sup>かみ</sup>の言<sup>ことば</sup>を聴<sup>き</sup>きて之<sup>これ</sup>を守<sup>まも</sup>  
 る者<sup>もの</sup>は福<sup>さいわい</sup>なり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) イエスがある村へはいられた。するとマルタという名の女がイエスを家に迎え入れた。この女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、御言に聞き入っていた。ところが、マルタは接待のことで忙がしくて心をとりにみだし、イエスのところにきて言った、「主よ、妹がわたしだけに接待をさせているのを、なんともお思いになりませんか。わたしの手伝いをするように妹におっしゃってください」。主は答えて言われた、「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配って思いわずらっている。しかし、無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである。マリヤはその良い方を選んだのだ。そしてそれは、彼女から取り去ってはならないものである」。イエスがこう話しておられるとき、群衆の中からひとりの女が声を張りあげて言った、「あなたを宿した胎、あなたが吸われた乳房は、なんとめぐまれていることでしょう」。しかしイエスは言われた、「いや、めぐまれているのは、むしろ、神の言を聞いてそれを守る人たちである」。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいは  
 主 光 榮 爾 歸 し、 光 榮  
 はんぢにきす。  
 爾 歸

※ 聖体礼儀③ (金ロイオアン) へ